

開府400年 名古屋城をめぐる 物語

今年、名古屋では開府400年記念祭として、1年を 通じてさまざまなイベントが行われている。徳川 家康がこの地に築城を開始したのが1610(慶長 15) 年。なぜこの地が選ばれて城が築かれ、御三 家尾張藩の拠点になったのだろう。その陰にはさ まざまな事情や思惑があった――。

「清須越し」から始まる名古屋の繁栄

「尾張名古屋は城でもつ」。名古屋にとって、金のしゃちほこを 戴く城は、シンボル的存在だ。名古屋が尾張の新しい首府として定 められ、築城が始まったのがちょうと400年前。名古屋の繁栄は、 築城とともに始まったのだ。それ以前の尾張の中心は名古屋の西 北にある清須だった。

徳川家康が、九男義直が藩主となった尾張藩の拠点を、繁栄し ていた清須から空前の規模で、新しい城と町の建築を計画・移転 した理由には、当時の政治情勢が大きく関わっている。名古屋城 築城が決まったのは1609 (慶長14) 年。1600 (慶長5) 年の関ヶ原 の戦いで勝利して家康は押しも押されもせぬ天下人となっていた が、依然大坂城に豊臣家は存続。秀吉恩顧の武将たちが寝返る 可能性もまだ大きかった。家康としては、大坂と江戸を結ぶ東海



開府の際拓かれた堀川

道の砦として尾張の守りを固め る必要があったのだ。

最初のプランは清須城を大 改築するものだったという。と ころが、家臣の一人が清須は低 地で水攻めに弱いからいっそ 移転してはと提案。台地の縁に あって熱田の港にも近く、東西 の交通も開けた那古野の地が 移転先として浮上したのだ。こ の那古野には群雄割拠の1500

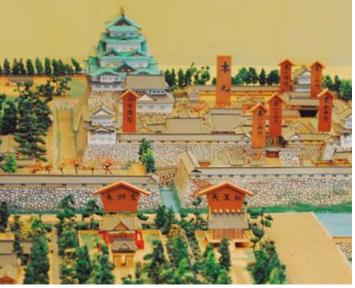
年代前半にまず今川 氏親が尾張の足場とし て柳ノ丸という城郭を 築き、その後織田信秀 (信長の父) が奪って 那古野城と名前を改



めた。信長はこの城で 清須越しで商人たちが移転してできた町、「四間道」界隈

生まれたともいわれている。やがて那古野城は信長の居城となっ たが、後に当時東海地方きっての町だった清須に本拠を移したた め、以後那古屋城は廃城となっていたのである。

他に小牧や古渡案もあったが、最終的に那古野が選ばれ、城 を築き、町割 (都市計画) を実施してインフラを整備したところへ 清須から藩主や家臣はもちろん、町民もすべて移転するという世紀 の引っ越しが行われることになった。神社仏閣や物資、人、町の機 能まで、当時大坂や京都などに次ぐ存在だった清須の町を根こそ ぎ移動する大事業は「清須越し」と呼ばれ、1610 (慶長15) 年から 築城関係者や武士、職人などが移転を開始、1613 (慶長18) 年ごろ までに完了したといわれる。清須から名古屋の新しい町までは約 6km。 今となればわずかな距離だが、 当時としてはたいへんな大事 業だった。町名や橋の名の中にも清須からそのまま移ったものが あって、現在も名古屋に残る伏見町や大津町、伝馬町、鍋屋町、五 条橋などは清須ゆかりの名前。ちなみに、熱田から城近くまで続く 堀川は、この時に町の守りと物資の流通路として掘られたもの。堀 川近く、広小路の南には三ツ蔵通りという道があるが、この三ツ蔵 も清須にあった名で藩の蔵が並ぶ場所だったそうだ。



江戸時代の名古屋城模型。奥に天守のある本丸、右に藩主の館がある 二の丸、手前が重臣や上級武士の屋敷が並ぶ三の丸

本丸御殿模型。現物の完成は平成30年の予定



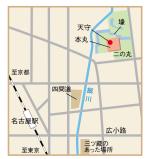
本丸御殿の復元工事は、見学することができる

◆これからの 開府400年記念イベント

- ●10/16~10/26 名古屋城 名古屋城本丸御殿玄関復元過程の 特別公開
- ●10/31 御園座 名古屋こども歌舞伎
- ●11/13~11/14 中京大学文化市民会館 名古屋開府400年記念 第36回将棋の日
- ●11/20~11/23 ナゴヤドーム 秋の大食楽市 ドームうまいもんワールド
- ●12/12 中京大学文化市民会館 クロージング記念コンサート
- ●12/17~12/25 久屋大通公園一帯 NAGOYAアカリナイト

体制安定策としての築城

さて、話を那古野から名も改めた 名古屋城へと戻そう。この築城は家 康にとって徳川の威光を示し、徳川 幕府の支配体制を盤石にするものと しても非常に大きな意味を持ってい た。最高峰の理論や技術が注ぎ込ま

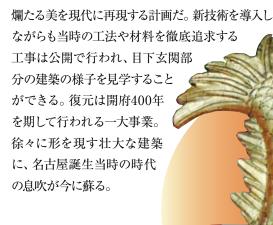


れ、守りが堅固なのはもちろん、天守の高さは大坂城を凌ぎ、延 ベ床面積は4400㎡以上で江戸城に勝る。まさに日本一のビッグス ケール。しかも土台を築く土木工事は、細川忠興や黒田長政、福 島正則といった秀吉恩顧の外様大名に当たらせた。「天下普請し といって費用はすべて大名持ち。再び豊臣方に荷担することのな いよう、財産を使わせ、戦力を削ぐことも家康の狙いだった。尾張 といえば信長や秀吉の出身地。大名にも尾張人は多い。そこに徳 川のために身を削って巨城を築く…、内心複雑なものもあっただ ろうが、駆り出された大名たちは競って幕府が示した基準を遙か に超えた人員と資金を投入。1610 (慶長15) 年の9月末には早くも ほぼ石垣が完成していたという。いちばん大切な天守台の工事は 築城の名手といわれた加藤清正が一人で受け持ったが、石垣積 みはわずか3カ月足らずで終えている。彼は修羅(木製の橇)に巨 石を載せて陸揚げした熱田から城へと運ぶ時、美しく着飾った小 姓と共に石に乗り、綱を曳く人たちをはやし立て、見物の人に酒を 振る舞ったと伝えられている。一方建設工事は幕府によって行わ れた。木材には木曽から切りだした檜がふんだんに使われたとい う。天守は小天守を橋台でつないだ「連結式天守」。なお、本丸 の四隅の守りを固める隅櫓のうち西北隅櫓は取り壊した清須城 の古材を利用したと伝えられ、清須櫓とも呼ばれている。

400 年を期して蘇る本丸御殿

今も広大な名古屋城の遺構を散策すれば、曲輪を取り巻く壮 大な石垣にかつての威容がしのばれる。天守も堂々と空にそびえ ているが、残念ながら現在のものは戦後に建てられた鉄筋コンク リート製。明治維新の時まで残っていた日本の城のほとんどは明 治政府の廃城令によって取り壊されたが、名古屋城はこの時には 幸いにも歴史的価値を惜しんだ当時の駐日ドイツ公使マックス・フォン・ブラントの進言によって生き延びている。その後1891 (明治24) 年の濃尾地震でもびくともせず名古屋のシンボルであり続けたが、1945 (昭和20) 年5月14日の空襲で本丸御殿 (藩主義直の居宅として建てられ、後に将軍上洛の際の宿舎となった)とともに燃え落ちてしまったのだ。名古屋城は市のシンボルであり、名古屋人の誇り。再建への願いは強く、募金も行われて1959 (昭和34) 年には現在の天守が完成。費用の3分の1は企業や市民の募金でまかなわれたというから、名古屋人の熱意のほどがうかがわれる。

幸い天守は戦前に国宝に指定され、実測調査で詳細に図面化されていたため、コンクリート造りとはいえ外観はほぼ忠実に復元された。同様に戦災で焼失した本丸御殿も、2009 (平成21) 年1月から再建工事が進められている。こちらも詳細な図面や写真類があり、忠実な復元が可能だ。しかも戦争中、万が一に備えて国宝345点を含む障壁画1049点が取り外されて保管され、焼失を免れている。これらについても忠実な模写復元を行い、かつての絢



金鯱は名古屋城の 象徴。これは本丸 御殿の復元祈願の ために作られた模造 の金鯱で、正門を 入ってすぐの場所に 飾られている

> 別冊 FROMはウェブサイトへ eふぁみり もあわせてご覧ください!



http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/